

対音資料研究法叙説——case2: 蒙古字韻(1)

中村雅之

1. 対音資料としてのパスパ文字漢語

対音資料は一つの文字に言語Aと言語Bという二種の言語が関わるという特徴をもっている。例えば、チベット文字漢語は本来チベット語(=言語A)を記すための文字で漢語(=言語B)を記した資料であり、漢字音写モンゴル語は漢語(=言語A)を記すための文字でモンゴル語(=言語B)を記した資料である。それでは、『蒙古字韻』に代表されるパスパ文字漢語はどうか。

パスパ文字漢語における言語Bが漢語であることに疑いはないが、言語Aが何かということが問題になる。パスパ文字は1269年に新たに公布されたものであるから、その際に漢語の音韻体系を過不足なく表記できる体系が考案されていれば、言語Aは存在しないはずである。ちょうど15世紀に朝鮮語のために考案されたハングルが対音資料でないのと同じである¹。しかしながら、パスパ文字漢語は漢語の音韻体系に十分に適応したとは言えない部分を持っている。それは、パスパ文字漢語が、実際にはモンゴル語の体系と比較しつつ、パスパ文字モンゴル語の表記に若干の修正を加えて作られたことによると思われる²。そうであるならば、パスパ文字漢語における言語Aはモンゴル語ということになる。

以下には、まず『蒙古字韻』に特有の誤記や字形の問題を述べ、次いで表記と音韻体系の問題を考えたい。

2. 誤写の多いテキスト

『蒙古字韻』は漢語の全音節をパスパ文字で表記した資料であるが、ロンドンにある清代乾隆年間の写本が現存する唯一のテキストである³。つまり、この資料の元代のテキストを見ることはできない。そしてこのロンドン写本は巻末部分にまとまった欠落があるほか、肝心のパスパ文字の字形に極めて誤写が多い。『蒙古字韻』研究では、誤写の可能性を意識しながら、字形を慎重に判断しつつ、漢語の体系と(時にはモンゴル語の体系とも)すり合わせる必要がある。

古い資料を扱う場合、誤写・誤刻あるいは資料独自の字形の癖などを注意深く見極める必


















¹ ただし、漢語やモンゴル語、満洲語を表記したハングル文字資料はもちろん対音資料となる。








² 例えば、匣母に相当する子音が直音音節と拗音音節で書き分けられるのはモンゴル語で口蓋垂音と軟口蓋音を書き分ける習慣の影響であろうし、滂母/p' /に相当する子音がモンゴル語/b/を表す文字のわずかな変形で表記されるのもモンゴル語に無声の/p/がないことによると考えられる。もしもモンゴル語を介在させずにパスパ文字漢語の表記が作られたならば、より漢語に適したものになったはずである。

³ 影印本は日本・中国・韓国から出版されているが、詳細な校勘記を施した中国版すなわち照那斯図&楊耐思1987が最も有用である。



要がある。特に孤立した資料では十全の校勘は難しく、誤記と気付かずに音声・音韻を考える際の根拠に利用してしまう危険性をはらんでおり、『蒙古字韻』もまさにその種の資料と言える。

3. 「此七字帰喩母」について

ロンドン写本では字母表が収められているが、その末尾に「    此七字帰喩母」とある。そこには「此七字」とありながら、実際には六字のパスパ文字しか掲げられていない(ように見える)。鄭光 2011 は、「実際に記されたパスパ文字は 6 つだが、字母に挙げられた喩母『, 』を含めると 7 つになる」と解釈した。ここを出発点として、鄭氏は独自の母音論を展開するが、これには二つの問題がある。まず、「, 』を含めると実際には二つ増える訳であるから、計算が合わない。鄭氏は「」と「」を単純な異体字と見なしたが、この二種は異なる字母であり、無条件に同一視することは許されない。そして何より、「   」の 5 番目の文字は「」と「」に分けるべきところを、誤って連書してしまったものと考えべきである。このことはすでに照那斯図&楊耐思 1987 においても指摘されている。 という形式がそもそも存在しないのであり、それに音価を当てはめることから出発した鄭光 2011 の説はあまりに空しい。



なお、「      」の 7 字母は「i, u, è, o, e, ü, i」と転写することができ⁴、いずれも母音性の字母であるために、みな「喩母に帰す」と解釈されたものである。最初の 4 字母は音節初頭の位置に立つ時の字形、最後の 2 字母は介音の表示に用いる。5 番目の字母はモンゴル語では女性母音のマーカであるが、漢語では単独で/ie/, 「eu」の形式で/ü/, 「eon」の形式で/üen/などを表す。

4. 「校 (jev)」について

ロンドン写本では、序文に続いて「校正字様」と称する部分がある。過去の伝本におけるパスパ文字の字形の誤りを正そうとしたものである。しかしながら、ロンドン写本においては、この部分にもすこぶる誤写が多い。見出しの「校正字様」のパスパ文字表記からしてすでに不正確な字形である。「校」にあたるパスパ文字は「jev」と転写すべき字形となっている。これは本来「gïav」が期待される部分だが、「 g」が「 j」になり⁵、「i(a)」が「e」になっている。このうち後者は誤りというよりもこの写本の癖という方が適当かも知れない⁶。前者は、かつて口蓋化(舌面音

4 パスパ文字の転写方式は吉池孝一 2005 による。

5 パスパ文字「g」は漢語の声母[k]を、「j」は声母[ts]をそれぞれ表す。

6 「i」は他のパスパ文字資料でも「e」と表記されることが少なくない。標準的な字形が期待される皇帝聖旨の碑文においてさえそのような表記がしばしば見られる。その理由としては、①字形が似ていること(字母表の書体では i が , e が  である)、②漢語の[ia]がモンゴル語話者にとって/e/と認識されていたことなどが考えられる。(漢語の[kia]が元代のウイグル式モンゴル文字で「ge」と表記されたことを参照せよ。)

化)の根拠とされたことがある。

花登正宏 1979 では、「校 jev」という表記を単純な誤写ではなく、牙喉音二等の声母が当時口蓋化していた可能性を示す例と判断した。つまり、標準的には[kiau]と発音された「校」が口蓋化(舌面音化)して[teiau]と発音されることがあり、その表れが「校 jev」という表記だという訳である

元代にいずれかの地域の人の発音で、牙喉音二等の声母が舌面音化していた可能性はあるだろう。しかし、ロンドン写本にそれが反映している蓋然性は高いとは言えない。それは、この写本の字形への信頼度と、編者と見なし得る朱宗文の言語を考慮に入れての結論である。

まず写本の字形への信頼度について。前述のように、ロンドン写本には誤写が多いが、この「校正字様」の部分も例外ではない。本来その意図からすれば、「校正字様」には最も正確な表記が求められるはずであるが、このわずか一葉の中にも相当数の誤写がある。声母に限っても、従母「ㄅ」が一面落ちて「ㄆ」となったり、幫母「ㄇ」が余計な線を増して「𠂇」となったりしている。そのような状況で「校 jev」という表記を見た場合、それを誤写と見なすのはごく自然なことである。ロンドン写本では「校正字様」の次に「蒙古字韻総括変化之図」という図があるが、そこに記された「g」も一面を欠く不完全な字形「𠂇」で記されている⁷。現写本が基づいた刊本では、「校」の声母も(墨のかすれなどの原因で)そのような字形であったと考えられる。つまり、「校 jev」における声母「j」は、「𠂇」→「𠂇」→「𠂇」という過程を経て生成された誤写である可能性が高い。

次に朱宗文の言語の問題である。現存写本は数種のテキストに基づいて朱宗文が校訂編纂したテキストの一つのバージョンであるが、編者の朱宗文は序文によれば信安の人である。もう一つの序文を書いた劉更が柯山の人であるから、この「信安」は浙江省の信安と見なしてよい⁸。牙喉音声母の舌面音化は一般に北方において顕著な現象である。朱宗文のような南方の知識人が、使用言語において牙喉音二等に舌面音化を生じていた蓋然性は低いであろうし、かつ文字と音声の関係を究明しようとした『蒙古字韻』『校正字様』において、不用意にそれを表記してしまうということはほぼあり得ない。

もしも、この「校 jev」という表記が朱宗文の時代の問題ではなく、清代乾隆年間の写本作成時の問題であるとするならば、清代の表記者の音声反映した可能性は皆無ではない。しかしながら、その場合には、表記者が無意識に自らの発音を表記してしまうほどにパスパ文字の使用に慣れていることになり、これも想定としては相当無理がある。「校 jev」については、やはり「校 giav」の誤記であると見るのが最も自然である。

(次号につづく)

⁷ 吉池孝一 1996 によれば、「蒙古字韻総括変化之図」はモンゴル語音節末子音をまとめた図であるが、この「𠂇」が「𠂇」を意図していることは、そこに添えられた漢字音写「克」によって明らかである。

⁸ 柯山および信安はともに現在の浙江省衢州市。

<参考文献>

花登正宏 1979.「蒙古字韻ノート——とくに開口二等牙音の舌面音化について」,『中国語学』
226:pp.13-16.

照那斯图&楊耐思 1987.『蒙古字韻校本』,北京:民族出版社.

吉池孝一 1996.「中世蒙古語の漢字音訳と蒙古字韻総括変化之図」,『日本モンゴル学会紀
要』27:pp.77-90.

吉池孝一 2005.「パスパ文字の字母表」,『KOTONOHA』37:pp.9-10.

鄭光 2011.「<蒙古字韻> 喻母のパスパ母音字と訓民正音の中声」,『東京大学言語学論集』
31:pp.1-20